

患者さんとの接点（1）

ある患者さんが「出血が続いて・・・」と不安そうに話しかけてきた。「そんなに心配することは無いでしょう。よく検査してみましょ」と言ってみると、既にどこかで検査を受けた形跡があり、尋ねると「先生には悪いと思って黙っていましたが、実は〇〇病院で検査をしてもらいましたが心配で・・・、〇〇さんが大きな病院で診てもらった方がいいと言ったので・・・」と診察が終わってからやっと話してきた。

日常の外来診療では、ほとんど問題にならないようなことを心配してくる患者さんが多く、分かりやすく説明して、病状を正しく理解してもらわなければならない患者さんの多いのが現状である。今は、医師と患者の＜インフォームド・コンセント＝医師が患者に十分説明をし、患者がそれに納得した上で治療を行うこと＞が非常に大切になっている。しかし、現実には忙しい外来で十分な説明をすることはできないことが多い。検査結果を見てから説明しようと思っても、患者さんにとっては十分な説明が無いということは大変なことである。診察室を出たとたん何が何だか分からなくなり、結果を聞いても判断する余裕も無く、身近な人に相談したり、“もっと大きな病院の先生に診てもらいたい”とあらゆる手づるを利用して病院を渡り歩く患者さんも多いと聞く。

「電話です」と言われて出てみると、他の病院の知り合いのドクターから「〇〇さんという患者さんをこちらで手術するのでよろしく」といった連絡だったりすることもあるが、逆に自分が先方のドクターに同じような電話を入れることもあり、そんな時にはいずれの場合でも割り切れない気持ちになる。

口では簡単にインフォームド・コンセントと言っても、心配して病院を転々とする患者さんに納得のいく説明をするのは非常に難しい。それは診察に来る前に家庭医学書等を読んだり、夫や友人、時には複数の医師からの情報を得て混乱していることが多いからである。

検査を受けても結果を聞かないでくる患者さんの言い分。「手術が必要だと言われたので大きな病院がよいと思って」とか、「先生がよく説明してくれないので不安で」等、理解できないこともないのだが□。

また、従来の＜与える医療＞から＜患者さん中心の、自ら健康を守る医療＞へと変わってきている以上、弱い立場の患者さんに納得して医療を受けてもらえる環境を作るための努力が医療スタッフには必要であって、＜患者さんの意識の向上・権利意識＞といったことを意識しすぎて、＜保身的な医療＞にならないようにしなければと思っている。ややもすると、患者さんと医師との距離が大きくなりかねない状況にあって、患者さんと医師にとって本当に大切なのは＜お互いに信頼関係をつくる＞ことではないだろうか。